立教大学ジェンダーフォーラム主催　第 75 回ジェンダーセッション
「「人形」は「女の子」のものなのか：人形をめぐる近現代史」

日　　時：　2018 年 7 月 23 日（月）　18：30～20：00
講　　師：　吉良智子（日本学術振興会特別研究員―RPD）
会　　場：　池袋キャンパス　4 号館別棟　4151 教室

第 75 回ジェンダーセッションは、日本学術振興会特別研究員―RPD である吉良智子氏に、明治期の国語教科書や少女雑誌、戦中の慰問人形、戦後登場したリカちゃん人形を例に、人形を通じて少女たちに課せられたジェンダー役割についてご報告いただきました。

最初に紹介された明治初期の国語教科書とそこに登場する人形を手にした女の子の絵は、アメリカの国語教科書を参考に作られていました。しかしその絵や文章からは、性役割が強固に固定化されていなかった前近代の日本が、近代化の過程で「良妻賢母」イデオロギーを取り入れるも、観念的にも実態的にも良妻賢母がどのようなものかよく理解していない「揺らぎ」が表れていました。明治 20 年代になると、女の子と母役割を結び付けるような、乳児的身体の人形をもつ女の子が描かれるようになります。その後、男女含めた概念であった「少年」から「少女」が切り離され、それぞれにふさわしい玩具・モノがあてがわれていったこと（少女には人形、少年には地球儀）が当時の雑誌の表象から説明されました。また戦中には、銃後の担い手としての少女たちが兵士のために制作していました。戦後になると、母役割を教え込むような人形から、自ら着せ替え用の服を作って消費するという、資本主義社会のもとでの人形の身体変化が生じたと指摘されました。1950 年代後半にはバービー人形が発売され、それに呼応するかたちで日本ではリカちゃん人形が誕生します。2002 年、妊婦のバービー人形（お腹を開けることができる）が登場しましたが、夫と同時発売されなかったこと、結婚指輪をつけていなかったため、「未婚の母」を連想させる「逸脱した身体」として保守層から反発があったといいます。それに対して 2001 年に発売された「妊娠した」リカちゃん人形の場合は、同封ハガキを送るとお腹をあけるカギと赤ちゃんと母子手帳が送られてくるという、日本の遅れた性教育に合致した、吉良氏のいう「『コウノトリ』システム」が採用されました。以上から吉良氏は、「あるべき『女児用人形』」とは、父親が誰なのかわからない子・そうした妊娠は「社会的に正しくない妊娠」であるという認識を受け付けるような人形であり、それは家父長制による女性身体の管理を意味していると論じられました。質疑応答では良妻賢母イデオロギーや、人形のもつ教育的役割について等、多くの質問が寄せられました。素晴らしいご報告をして下さった吉良先生に、心より御礼申し上げます。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局・土野瑞穂）

セッションの様子